

the ToneQuest

The Player's Guide to Ultimate Tone

Report™

- Magnatone USA その80年 -

新しく生まれ変わったマグナトーンアンプは、かつてのオリジナル製品にインスパイアを受けながらも、その真似事には決して甘んじていない。むしろそれらを追い越し、さらに優れた製品を生み出している。テッド・コンブラム氏(現マグナトーン CEO)と同社は目を見張るようなパフォーマンスを持つアンプ群を作り出し、さらにそれらにヴァンテージアンプが今まで発揮できなかったような能力まで与えている。ピッチシフティング・ヴィブラートは注目すべきエフェクトであり、リバーブやトレモロ機能も同じく魅力的なものだ。しかし、一番所有欲を掻き立ててくるのはそのアンプの根底にあるトーンだろう。卓越した最新技術やデザインとともに、本当のヴァンテージトーンがあなたのものになる。



TQR 記者：会社の設立以降、マグナトーンアンプはあなたにどのような影響を与えてきたのでしょうか。



テッド・コーンブラム氏(CEO)：

「2013年の NAMM ショーでのマグナトーンブランドの復活に先立ち、私はプロがアンプに必要とするトーンのほぼ全てを完璧に調査する必要がありました。これは完成していないのに焦って NAMM へ出品してしまうことにより、市場からのリクエストをリアルタイムで聞くはめに陥り、設計等を NAMM 開催中に仕上げなければならなくなるのを防ぐためです。マグナトーンは1969年頃に事業をたたんで以来息を潜めていました。したがって、マーケットへは徐々に参入し、一般客やアーティスト、ディーラーの間で口コミを広げることでブランドの浸透を考えました。そうしたことが、売上を増やし、追加注文を得ることにつながりました。私たちは目標を成し遂げることができました。現在4年目となりますが、日ごとにますます多くの人々が我が社について興味を持ち始めています。また特定の販売店へのみ商品を売ることで価格の維持を行っているので、購入者がより安い価格のものがあるのではないかと心配や、ディーラーが MAP(最低広告価格)を割っている他ディーラーの心配をしなくても済むようになっています。”信頼あるディーラーネットワーク”を作りたいんですね。」

TQR 記者：すでに何人かの素晴らしいエンドーサーを獲得しており、上手くいっているように窺えます。

テッド・コーンブラム氏(CEO)：

「まず私たちは、“エンドーサー”はよく特別扱いとかアーティストがアンプを無料で受け取っているかのような誤解を招かないよう、エンドーサーも一般ユーザーと同じように対応していると申し上げたい。ギターアンプの良い点として、プレイヤーは自身のトーンを引き出すために一般的に複数のアンプを使用しますが、マグナトーンがその中の1台に選ばれていることは、チャンネル切り替え式アンプを作っていないだけになおさら誇りを感じます。マグナトーンで演奏するアーティストは、人気のあるヴィンテージアンプに精通したサウンドとトーンを持つ新品のアンプに出会えたことに皆喜んでますよ。アーティストは新しい機材に出会っても、それに徐々に慣れていかなない限りその機材を新しく追加しようとはしませんからね。私たちと関わりのあるアーティストやエンドユーザーは、ヴィンテージアンプがどれくらい素晴らしいサウンドが出せるか知っていますが、とてもデリケートで壊れやすく、コンディション良好なものが年々入手困難になっていることも知っています。私たちが製作するアンプがアーティストの間で有名なヴィンテージアンプに代わる存在として認知された証として、それらヴィンテージアンプは、彼らの家で大切に保管されています。」

「さまざまなブランドから出され世間で評判となっているアンプのモデルのうち、我が社がベンチマークとして標的を合わせるべきものはたった9つほどくらいしかないと考えていますので、新製品のマグナトーンアンプはそれら有名なヴィンテージサウンドに立ち向かうために調整され、しかもパテント取得のピッチシフティング・ヴィブラートやブティック・クオリティ、アメリカンメイド・クラフトマンシップも備えています。色々な製品に触れる機会が多いアーティスト達、取り分け私たちと一緒に取り組んできた伝説的アーティストは、新しいアンプを購入してもらる以前に、心を動かすことすら時間が掛かります。マグナトーンアンプはアーティスト達にとっての嬉しいサプライズとなっており、私は今でも彼らが「新品のアンプがこんなに凄い音を出せるのかよ！」と言っているのを聞いています。新しいマグナトーンアンプを弾いている全てのアーティストはアンプを購入していますよ。というのも私がアーティストにアンプを売ることを自身に誓い、タダで渡すようなことを

しないと決めたからです。アンプが良い場合、つまり、最高だったら、彼らは購入していくのです。Master Collection を使用するプレイヤー、とりわけピリー・ギボンス氏、ジェフ・ベック氏、また最近ではテッド・ニュージェント氏、キッド・ロック氏は Master モデル群にあるようなマスターボリューム仕様を好んでいます。私たちはチャンネル切り替え式アンプを製作する気は無く、マスターボリュームを持たない Traditional Collection モデル(Brown and Gold)を製作し、またマスターボリュームを持つ Master Collection モデルを製作し、両方の客層に妥協なく製品を届けられるようにしたのです。」

「タウンゼント氏、そして他の方々(ここで挙げるのには多過ぎるので割愛)はマスターボリューム無しのアンプを好んでおり、これらのアンプのタッチの繊細さやダイナミックレンジは彼らに衝撃を与えたようです。必要な場合はペダルを用意して追加のゲインを稼ぐこともできますが、彼らの場合はギターのリックを使用し、これを下げることでアンプトーンをクリーンにし、また上げることでパワー管でナチュラルディストーションを獲得してアンプに彩りを加えます。」

「Traditional Collection を弾いていた他の優れたプレイヤーといえば、今は亡きトム・ペティ氏ですね。先日の 40 周年記念ツアーでは楽屋に Panoramic Stereo Head を用意して、左側に 1x12”、中央に 2x10”、右側にもう一つ 1x12”スピーカーキャビネットを設置し、“トゥルー・ディメンショナル・サウンド”(True Dimensional Sound)のセットアップを行っていました。彼が 2017 年のパーソン・オブ・ザ・イヤーの受賞イベントで演奏した際には Twiligher Stereo の 2x12”コンボを使用していましたよ。悲しいことに、彼からの支払いを受け取ったその日に彼が亡くなったことが発表されました。本当に最高の才能を持った人物でしたね。」

「事実として、最初に私たちのアンプに繋いだとき、みなさんはすぐに自身のサウンドに辿り着きます。私たちはこれを”15~30 秒ルール”と呼んでいます。その時間のうちに求める音が出せなかった場合は、あなたに合っていないということです。このルールを教えてくれたラリー・クラッグ氏(ニール・ヤング氏のギターテクニシャン)は今でも私のベンチマークであり続けています。」



オベド・カン氏(エンジニア):

「マグナトーンアンプはたくさんのアーティストやミュージシャンコミュニティからの支持を獲得してうまく軌道に乗っており、ブランドの歴史を保ちつつ、将来をこれからも牽引することができ嬉しく思います。ユーザーからの溢れんばかりの賛同を目の当たりにするのは本当に素晴らしいことです。」

TQR 記者:アンプを製作する会社を新しく設立することにおいて、もっとも試練となったことは何だったのでしょうか?

テッド・コーンブラム氏(CEO):

「それはおそらく、マグナトーンが復活しただけでなく、以前よりも優れたものになったことを多くの人に認識してもらうということでしょうね。私が大いに尊敬しているアンプ会社は数多くありますが、新しいアンプ会社にとって、注目を集め、長い間その状態を保つこと。これが本当の試練です。私たちはこの試練

を乗り越えることができたと思っていますが、先も述べたように、この世界という巨大なマーケットで、時間が経つにつれより多くの人々がマグナトーンについて興味を持つようになるでしょう。」



「全て手作業で製作しており細部までひとつ残らずこだわっているため、時間が掛かりますしコストも増えます。つまり私たちが辿り着くことのできるマーケットの規模が制限されてしまうのです。私たちが行っているようなアンプ製作に掛かるコストにより時に生産数が制限されてしまいますが、私たちはまだ小さな会社であり、これからの成長に伴い生産効率も上がっていくことでしょう。一から会社を始めるのはとても大変なことです。私たちは量産ではなくベストなものを作ることに今も重点を置いているのです。」

「プレイヤーのみなさんはギターアンプが彼らのトーンの中で果たす役割の重要性を軽視する傾向があり、多額のお金をギターの購入に注ぎ込み、それを平凡なアンプに繋いでしまっているように思います。ギターはかなり重要な要素であり、得られるトーンにも大きく貢献していることは理解していますが、しかしアンプはサウンドの少なくとも半分を占めているので、ギターとアンプの正しいバランスを見極めることが重要です。」

オベイド・カン氏(エンジニア):

「多くの試練がありました。物流管理、製造、マーケティング計画、財政状況など、経営におけるあらゆる側面が製品やブランドを成長させていく中で、それぞれの試練を抱えていました。」

TQR 記者:何かしらのサプライズ等はありませんか?

テッド・コーンブラム氏(CEO):

「高級志向の顧客に応じられる能力を持つような優れた店舗では、新たに扱うアンプを選ぶ際に多くの選択肢があるため、我が社のアンプを置いてもらうのに少々時間が掛かったのですが、そのような主にヴィンテージの機材を扱っているお店で、新品のマグナトーンアンプがヴィンテージサウンドを奏でるアンプとして、しかも実際の傷だらけのヴィンテージのものより気難しくないものとして置かれており、これが良いサプライズとなりましたね。」

「他に学んだことを言うと、Master Collection モデルを購入するような客層はビルドインのトレモロやヴィブラートにこだわらないということですね。彼らはモデルにあるようなマスターボリュームやエフェクトループを好む傾向があり、ビルトイン・エフェクトは必ずしも使われるとは限らないのです。しかしこういったエフェクトをユニットに組み込むとコストが高くなります。なので 2018 年にはエフェクトを搭載したものとそうでないものを提案しようと企画しています。エフェクト無しモデルはパーツ点数が少なくなるために価格が抑えられますからね。しかもアンプのクオリティは同様のままです。私たちは浮いたコスト分をみなさんに還元できるので win-win なのではないでしょうか。そしてヴィブラートを使う客層がいることも認識しているので、エフェクト搭載の Traditional Collection のモデルも引き続き販売していきますよ。」

「また、この 1 年で海外輸出が軌道に乗ったことにも感動しましたね。元々のマグナトーンが 1969 年頃に業務を停止する前はアメリカ国外にアンプを販売するようなことは決してしませんでした。私たちは現在 4 年目ですが、輸出額は増加傾向になっており、マグナトーンが世界に認められていることに非常に満足しています。」

「最後に、私たちは人々がアンプにパワーアッテネーター等を使用する考えを好むことを知っていますが、これを私たちのデザインに組み込む選択はしませんでした。しかしマスターボリュームが無いモデルのパワーアンプを、音量レベルを上げ過ぎずにプッシュできるようないくつかの良い出来を持ったアッテネーターのサウンドは好きですよ。おかげで近所からの苦情も来なくなりますね。」

オベイド・カン氏(エンジニア)：

「もちろん重要な問題はいくつか抱えていましたよ。期日の変更やリードタイム、予期せぬ規格検査とか。マグナトーンは電気安全性規格に全て準拠していることをご存知ですか？他のメーカーが同じことを言えるとは思いませんね。私たちの工場では、生産工程に係る定期的点検に加え、安全設備でも法令を遵守していますよ。」

TQR 記者：新しい会社の設立における最重要課題の1つとして、一貫性を保つことが挙げられます。コンデンサや抵抗、トランス、スピーカー等々、多くの異なったメーカーからそれぞれの製品を使わなければいけないと思いますが、それぞれのアンプに当初設定した性能や仕様、デザインを反映させるためにどのように一貫性の維持や管理を行ってきたのでしょうか？

テッド・コーンブラム氏(CEO)：

「一つ確かなことは、私たちの全てのアンプは一貫したサウンドを持っており、同じモデル内でサウンドの違いはありません。それぞれのモデルのトーンにそれぞれ到達基準を設定し、クオリティの維持や部品会社に高い水準を要求しています。私たちは早い段階でアンプを長持ちさせる開発プロセスに至りました。ヴィンテージ真空管アンプのリペアを行っている Amp Hole のボブ・ディクソン氏が我が社を訪れ、マーケット出品前に製品を点検してくれたので、私たちの使っているパーツはとてクオリティが高く、またアンプの耐久性は注目に値するものと確信しましたね。」



「ニール・ヤング氏のギターテックを長く務めているラリー・クラッグ氏も信頼性の高いパーツや製作会社を選ぶ上で重要な役割を果たしてくれました。彼はヴィンテージアンプの専門家であり欠陥品の見分けに長けていて、私たちは彼の話に注意深く耳を傾けました。ニール・ヤング氏は今までも、そしてこれからも Traditional Collection のモデルに対し大きな影響を与えてくれるでしょう。ニール氏と共に取り組むことは素晴らしく、彼は自身の求める音を正確に把握しており、まるで矢のごとくパワーやトーンにまっしぐらです。ニール氏の望みを伝えてくれたこと、またそれを専門的な視点で捉える能力を持ったラリー・クラッグ氏にとて感謝しています。」

「長くニール・ヤング氏の FOH(フロント・オブ・ハウス)エンジニアを務めるティム・マリガン氏やデイヴ・ロア氏はショーの後に何回も、ファンが彼らに「ニールの使っているマグナトーンは特別な音が出るようにモディファイされているんですか？」と言ってくることを教えてくれました。そして彼らは「いえ、あれは完全に通常品であり、同じアンプを買えば同じ音が出ますよ」と微笑みながら答えるのです。それは高水準のパーツや高いクオリティを保って生産していることを誇りにしている私たちにとって最高の賛辞です。ニール氏は新品のマグナトーンアンプを5台ほど購入しており、Twilighter 1x12”と Twilighter Stereo を主に使用しています。また彼らが

ファンのアンプの質問に答える時に微笑むのは、ニール氏の使用する機材の多くはヴィンテージ品であり信じられないほど多くのメンテナンスを必要とするので、信頼性がありヴィンテージと同等の価値を持つ新品のアンプを使えることが彼らにとってもニール氏にとっても喜ばしいということがあるからでしょう。」



「ビリー・ギボンズ氏は、私たちにマスターボリューム搭載モデルの製作のインスパイアを与えてくれたこともあり、彼は今でも Master Collection モデルの主要人物です。そして彼の長年のテクニシャンであるエルウッド・フランシス氏もギボンズ氏の言葉を紐解くうえで大きく貢献してくれた人物でした。」

「ビリーはマグナトーン復活の際に大きく関わってくれました。何しろ私が最初にマグナトーンブランド復活の旨を伝えた人物の1人でしたからね。彼が求めたものの一つに、ゲインを維持してほしい、ということがありました。こういう言い方をしていましたよ、「ゲインが無ければただのペインだ (“retain the gain, or feel the pain.”)」。なので Master Collection モデルは全てエフェクトループとマスターボリュームを備えていますよ。彼の目標は、ペダル無しで”ギボンズ・トーン”を得ることができるマグナトーンアンプの創造でした。彼は新しいアンプを製作するうえで必要なもの、そうでないものを確かに知っていたんですね。」

「ビリーはマグナトーンにとって父のような存在でもあって、彼の友達やファンに誇りを持ってマグナトーンアンプを紹介してくれます。その紹介された友達のなかでも注目すべき一人の人物は、他ならぬ本物のトーンの達人、ジェフ・ベック氏でした。ジェフは Super Fifty-Nine MK II を 4x12 のキャビネットに繋いだ際のヘッドルームの広さを気に入っていて、長年使用してくれています。今マグナトーンを語る際に、ジェフ・ベックが後ろ盾の存在でいてくれるのは本当に誇りですね。ウル(ハリウッドにある野外音楽堂)での彼のライブを収録した DVD でそのサウンドを聞くことができます。」

「この DVD でもギターを弾いている女性ギタリスト、カーメン・ヴァンデンバーグさんもマグナトーンの Twilighter Stereo 2x12 combo を使用しています。彼女はジェフに敬意を示す偉大なギタリストですね。」

オベイド・カン氏(エンジニア):

「私たちはそれぞれのアンプで”決まり”を維持しています。全ての部品はそれぞれ同じ仕入れ業者から取り寄せています。Magnetic Components や Warehouse Guitar Speakers 等の素晴らしい人々と協力することができるのは幸運ですね。彼らはクオリティを維持し私たちの設けた基準と同等の水準を一貫して保っています。もちろん A/B テストを行うための「黄金の見本」を私たちは所持しており、それらは 2013 年に組み上げられたユニットで、ラリー・クラッグ氏によるお墨付きです。基準としているものは常に保管していますよ。」



クリス・ヴィラニ氏(プロダクション担当)

「製品を作り始めたその日から部品を取り寄せる会社は変えていません。パーツや配線、パフォーマンスの参考とするためのそれぞれのモデルのサンプルはずっと保管しています。私たちは年2回の安全コンプライアンス検査を行っており、それによって部品や組み立ての変更点がないか、また電気系統に求められる品質は満たしているかを確認しています。」

TQR 記者:それぞれに少々の相違はありながらも、全てのマグナトーンモデルの間には確固たる類似性があるように思います。一番人気のある機能はユーザーからの声に基づいた場合何になるでしょうか？

テッド・コーンブラム氏(CEO):

「明らかに人気のある機能はピッチシフティング・ヴィブラートですね。50年代にマグナトーンを世に知らしめたバリスタを使った同じエフェクトを再現し、エンジニアのオベイド・カン氏による専門技術も導入しアンプのサウンドはヴィブラートと共により一層良いものになりました。ヴィンテージのヴィブラートモデルは素晴らしいサウンドでしたが、新品のマグナトーンほどではありません。アンプのサウンドを優れたものにしてくれたオベイド氏の知識は何よりも称賛に値します。彼のその知識のおかげで、ヴィブラートをオンにしたときもトーンやヘッドルームに悪い影響は出ません。かつてのマグナトーンアンプはエフェクトをオンにしていなくてもバリスタ・ヴィブラートの搭載による影響を少々受けていました。しかし彼はこの問題に対処する方法を見つけ出したのです。これには彼の技術が不可欠でした。」

オベイド・カン氏(エンジニア):

「これはラリー氏がいつも言っていることであり、私もそうであるとはっきり信じていますが、何よりもクリーンサウンドとヴィブラートが良いサウンドでなければいけません。私たちはこれを成し遂げたいと思います。Twilighter が今まで体験した”デラックス”タイプのアンプの中で1番であることを、私たちのお客様は毎日伝えてくれます。独自のピッチシフティング・ヴィブラート—私たちが成し遂げたような、アンプサウンドとの自然な融合が可能なアンプは他に存在しません。ペダルを使っても同じサウンドは出せませんし、ヴィブラートはとてとてもオーガニックで、アンプのゲインブレイクアップ中でも敏感に反応します。誰もが夢中になる本当にユニークで他にはないサウンドです。」

TQR 記者:バリスタによるピッチシフティング・ヴィブラートは明らかな成功でした。これから先何か新たな目玉となるものを世に出す計画はありますか？



テッド・コーンブラム氏(CEO):

「よくバリスタヴィブラートのペダルバージョンを作ることについて聞かれますが、私たちはマグナトーンの中で生まれる”マジック”を大切にしたいのです。ステレオで鳴らしたときは本当に立体感あるサウンドが生まれます。私たちはバリスタヴィブラートを大切にしたい、誰でも様々なパーツを使ってヴィブラートエフェクトを作り出せますが、バリスタは私たちの個性を作ってくれるものなので、”本物”を希釈するようなことはしたくないですね。」

「ヴィブラートを組み込んだ他の製品を製作する計画はありますよ、直ぐにはないですが。RolandのJC-120 StereoはヴィンテージのMagnatone 280のサウンドを基にしたというのはよく知られている事実で、彼らはソリッドステート技術を使ってこれを製作しています。なのでいつかその技術を導入したモデルを製作し低価格で提供できるようにしたいと考えていますが、人々が最終的に求めるものはそれ以上のものです。彼らは、誰もが作れる以上のものを手にすることをまさに

望んでいるのです。」

オベイド・カン氏(エンジニア):

「新しい仕掛けや装飾? 必要のないものは私たちはアンプに付け加えません。ギタリストは伝統的な種族です。今の若い人たちもロックンロール黄金期に活躍したチューブサウンドやクラシックアンプを求めています。新しい製品はいくつか作るかもしれませんが、必ず機能的なフィールやデザインを持つことになるでしょう。」

TQR 記者: 私たちは過去に Magnatone 190 1x12 のレビューを掲載しました。今まで製作されたものの中で最も素晴らしいトーンを持つヴィンテージアンプの1つというのが私たちの意見です。Deluxe とは違い、よりクリーンでヘッドルームがあり、それでありながらも滑らかなオーバードライブも鳴らすことができます。おそらく私たちが今まで体験した中でも最高のサウンドを持つ 20W の 1x12 コンボアンプでしょう。このモデルを復活させる計画はあるのでしょうか?



テッド・コーンブラム氏(CEO):

「ToneQuest による 190 モデルのレビューは読みましたよ。そして 190 を購入することができ、これについて学ぶことができたのは幸運の一言に尽きます。私は簡単に周波数のカットやブーストができるようになるロータリーセレクターが好きですね。また、このアンプは 12 インチのメインスピーカーと共に小さなスピーカーをもう一つ備えており、ハイファイさがコンセプトとなっている 280 モデルにも通じるものがありますね。190 モデルはトップロード式のシャーシ(ノブやスイッチ等のコントロール類をアンプ上部に設置する方式)を採用しており、これによりリアマウント式(アンプ背面にコントロール類を設置する方式)よりもノブにアクセスがしやすくなっている点も好きです。また、

190 モデルはエフェクト類を搭載していないので、Traditional Collection として提供することができますよね。全てのアンプがエフェクトを持つ必要はないと思いますが、それが適切である場合はヴィブラートを加えようと思っています。」

オベイド・カン氏(エンジニア):

「テッドはマグナトーンのヴィンテージアンプやエレクトロニクスを大量に秘蔵していますよ。私たちはかつての製品の真のリイシューはまだ何もやっていないですね。いずれやるかもしれませんが、テッド次第ですね。」

クリス・ヴィラニ氏(プロダクション担当)

「卓越した”眠っている”アンプは数多くあり、190 モデルも確実にその中の一つですね。この特別なモデルは、我々の中でも引けを取らない Traditional Collection のモデルと比べて大きく異なっていますので、ひょっとしたらオリジナルの実機をトーンの参考として使いながら何らかの形で復活させることになるでしょうね。」

TQR 記者: マグナトーンの将来はどうなのでしょう? 新しいモデルは開発するのでしょうか? 何を期待できますか?

テッド・コーンブラム氏(CEO):

「2018 年には 15W でマスターボリューム搭載の低出力モデルを Master Collection に追加する予定です。Super Fifty-Nine モデルは両方とも 45W なので、これよりも価格を下げて提供できます。新しい Super 15 は 2 つの EL84 やクールな機能を搭載し、2018 年の NAMM で紹介する予定です。」

オベイド・カン氏(エンジニア):

「先ほど述べたように、会社の成長にはテッドの考えによるところが大きいですね。」

TQR 記者: 会社設立当初に抱いていた期待はどういったものだったのでしょうか？またその期待はどのような結果になったり、どう驚きをもたらしたのでしょうか？

テッド・コーンブラム氏(CEO):

「私はギターアンプデザイナーではないので、世界最高の知識を持つ人々に意見をもらうことにしました。マグナトーンのようなアメリカブランドを復活させ、そして前よりも優れたものにながらも有名なピッチシフティング・ヴィブラートを維持するという挑戦に私は駆り立てられました。他の会社からは多くのことを学び、彼らに起こった良いことやあまり良くないことも学びました。私たちはメイドイン USA で長く使うほどサウンドや価値を進化させる製品を長く待ち望んでいたため、長持ちしながら、適正な価格を持つだけでなく他社のコピーでは終わらない製品を作りたいかったです。」

「私は自分が編成したチームに誇りを感じています。また小さな会社として、お客様と販売店の両方と有意義で健全な関係を形成できることを知っています。過剰な生産をしたり質を落とすようなことをして価格を落とすようなことはしません。現在このようなことがあちこちで行われていますが、それは私がマグナトーンと共に描いたゴールとはかけ離れたことです。」



「アメリカで製品の製造に携わる就職口を作れることに私は非常に喜びを感じますし、チームの人間には会社と共に成長する手助けをしたいと思っています。あまりにも多くの会社が急成長したり、最低価格に追い付こうとしていますが、これは大きな落とし穴です。低価格帯の市場は、もはや非常に多くの製品群で溢れかえっています。これ以上何をこの市場に投入する必要があるでしょうか？私は価値ある製品を作り、お客様と従業員両方に対して可能な限りの透明性を持ったビジネスを行うことを信条としています。様々な人々が手を取り合って進んでいくことが成功を生み出すのです。」

TQR 記者: アンプの音作りに多くの人々を関与させることで学んだことは何だったのでしょうか？

テッド・コーンブラム氏(CEO):

「マグナトーンの再始動に幸運にも関わってくれた多くの人々の才能に日々恐縮していますよ。正しいチームを作り、それを指揮できれば、そのチームの力は堅固になり、いずれは山をも動かせるようになるのです。私は若い頃から数々のバンドのツアーを見て学び、バンドを成功に導くためのさまざまな要素について理解することができました。常に前線に立ち長く続くバンドは、ファンからツアースタッフ、ギターテック、マネージャーに至るまで、自分たちを支えてくれる人々を大事にするバンドなのです。私たちはみな人間であり音楽事業においては機材も曲も作りますが、その両方が人々を幸せにし現実の生活に和みのひとときを与えます。音楽機材の製作は私を幸せにしてくれますが、もしそれが他の人々も幸せにし、またそれにより就職口を作れたり、確固たる生活の土台を作れるなら…とても嬉しいですね。」

TQR 記者:これからについてお聞かせください。

テッド・コーンブラム氏(CEO):

「私たちは過剰な数のギターアンプモデルを作る必要はないと信じています。それは多くの会社が陥ってしまう罠であり、ブランドの力が弱まってしまったり、商売に混乱をきたす原因になってしまいます。私はハイファイなサウンドを好んでおり、近い将来に高級志向のオーディオマーケットに参入することを計画しています。見た目もサウンドも良い演奏機材を製作することに心惹かれますね。かつてのマグナトーンはギターやギターアンプを作る前に一体型の真空管パワーアンプや、レコードプレイヤー、業務用ラジオなどを製作していたため、このやり方はマグナトーンにじっくりくると思います。かつてのマグナトーンの成してきたことに倣うことは私が見識を得る要因となっており、400 以上ものマグナトーン製品を何年にも渡って寄せ集めました。したがってこういった商品の市場はかつて存在していたのを知っており、真空管や新技術を用いてより良いものにでき、ギターアンプ以外のものも徐々にマーケットに進出させることができると思います。」

「現在、ギターマーケットは優れた安価な製品、高価な製品両方で雑然となっており、これ以上マーケットの状況はまったく変わらないかのように見えます。まあ誰にもわからないことですが…市場では価値ある製品ならば、ディーラーがそれを販売し、客が買うといったことには際限がないのですから。カーオーディオでさえ興味深く、それが基になり私たちは”ステレオ”や”トゥルー・ディメンショナル・サウンド”を開発し、そして動きのないサウンドにピッチを揺らすエフェクトを掛けられるボタンが製品に付くことに至りました。かつてのマグナトーンがヴィブラートを持つに至った経緯も根本的には一緒で、彼らはテレビのブラウン管がアメリカ国内で製造されていた時代に、その動作を安定させる技術が基になりヴィブラートを開発するに至ったのです。もちろんそれはデジタル技術や LED 登場以前のことでした。」

「来年マグナトーンは創立 80 周年を記念し、1 年に渡っていくつかのリミテッドエディションモデルを発表する計画を立てています。私は 1937 年頃の設立からマグナトーンが作ってきたモデルを包括するほどのヴィンテージのマグナトーン製品の巨大なコレクションを所有しており、それを紹介する本を優良な出版社を通じて出版したいと考えています。」

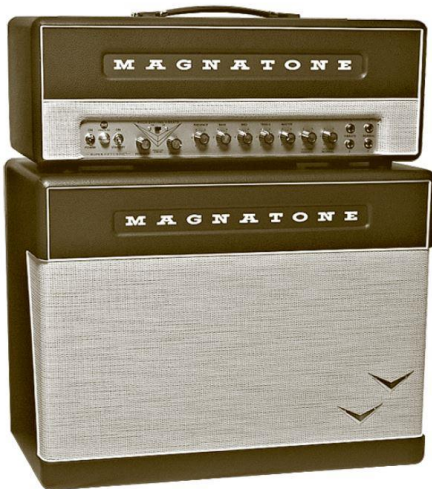


「またそのヴィンテージアイテムを展示する移動型展示を開催したいと考える多くの団体とも協議中です。80 周年記念本はそれが行われる時期に販売することになるでしょう。タイトルは”Magnatone: Past to Present”です。」

BEHIND THE SCENES

The Making of Magnatone Amps

Super Fifty-Nine MK II COMBO / HEAD



Super Fifty-Nine's MK I

MARK IIは「ペダルと相性が良い」モデルを目指して製作しました。MARK Iは低めのボリュームにした際に特徴的で、またペダルを必要としないアンプとして製作したためです。例えば、ビリー・ギボンス氏はアンプから自身のサウンドを得ており、ペダルを必要としていなかったのです。

私たちは確実にそのモデルが作れたと確信しています。MK Iのユーザーはボリュームを低めにしてプレイし、ゲインもアンプから得るのを好みますが、MK IIのユーザーはペダルを使ってプレイし、ほとんどの場合において大きめのボリュームを欲しています。両方のアンプともに同じパワー管を使用していますが、MK Iは2つの追加ゲイン・ステージを搭載しています。

2018年にはMK IとMK II両方を1つにまとめたアンプの製作を計画しており、ユーザーが付属のフットペダルでゲインの切り替えができるようにしたいと考えています。この新しいモデルはビルドイン・エフェクトの搭載は無いでしょうが、現在のものと同じようにエフェクト・ループは搭載することになるでしょう。Master Collectionのユーザーの方々は、トレモロやヴィブラート、リバーブ等のエフェクトが搭載されている Traditional Collection モデルのユーザーほどにはそういったエフェクトを必要としないこともわかりました。新しい Master Super Fifty-Nine ではトレモロやヴィブラートに関するパーツのコストを削減して売価を下げ、トーンやクオリティでの妥協なく手頃な価格設定をすることができるようになります。エフェクトを取り除くことのみによりコストの削減ができ、これで浮いた分を皆さんに還元できるようになるのです。

Panoramic 2x10 / HEAD



44Wで、それゆえ少し重くなっている Twilighter Stereo よりもパワーが低いステレオモデルを作りたいと思っていました。そのため Panoramic Stereo はそれより軽く Twilighter 1x12 とほぼ同じ重さになっています。ですがこれはステレオモデルであり、プリアンプは Varsity Reverb に似ていますが、Varsity Reverb はパワー管に1ペアの EL84 を使用しているのに対し、このモデルは2ペアの EL84 を使用しています。

Varsity Reverb / HEAD



Studio Collection としての前モデル(Varsity)と同じサウンドと設計を持っています。2つの EL84 パワー管を搭載している人気があり、Twilighter 1x12 と同じキャビネットサイズで、Traditional Collection と同じ外観(gold and brown)になっています。フルサイズの真空管駆動リバーブを搭載していますが、ヴィブラートやトレモロはコストが上がってしまうため搭載させていません。私たちはこのアンプを Traditional Collection の中で最も手の届きやすいモデルにしたかったので、また Studio Collection で行ったように全てが手作業でポイント・トゥ・ポイントで配線されています。購入客は 3 つのコレクションよりも 2 つのコレクションの間で選択する方が簡単だと我々は判断したため、Studio Collection モデルは廃盤とすることになるでしょう。したがって Master Collection (black and silver)と Traditional Collection (brown and gold)を販売していく考えです。

細部へのこだわり

- ・アンプカバーはレクサス、BMW、キャディラック、ロールス・ロイス社等のコンバーチブル車のトップを作っている製造会社により製作されたもの。アメリカ製であり、リバーブ・バッグも同様。
- ・アーミッシュが作るレザーハンドル
- ・コットン 100%の製本被覆
- ・フットスイッチ同梱
- ・特許取得のバリスタを使ったステレオ/モノのピッチシフティング・ヴィブラート
- ・アメリカ国内で製造
- ・真空管を使ったトレモロ

Larry Cragg Guitar Repair や Vintage Instrument Rental を経営しているラリー・クラッグ氏は Twilighter 1x12 や Twilighter 2x12 の製作に個人的な関心を寄せている。お気づきになるようにそれらは彼のお気に入りのマグナトーンアンプなのだ。

モノラルの Twilighter 1x12 は現在の私たちのためのアンプだ。ソフトで、ラウドで、重量を抑えながらも大きく卓越したトーンを響かせる。Super Fifty-Nine's MK I に使われている Warehouse Guitar Speakers 社製のスピーカーは Celestion 社製のものよりも優れたサウンドを持つ。一般プレイヤーであれば Twilighter 1x12 が適しており、ロックスターであれば 2x12 のステレオバージョンが適するだろう。2つを同時に試してみれば 2x12 は若干大きくリッチなサウンドを持っていることに気づくであろうが、かなり重くなるためローディーが必要となる。これは実際には完全に独立した 2 つのモノラルの Twilighter なのだ。

TQR 記者:構想当初からこのアンプはどのように作られてきたのでしょうか？

「最初のモデルとしては Single V で、これはツイードの Pro アンプに 2x12' のスピーカーを乗せたものでした。これは上手いきましたがとても重くなってしまい、値段も高くなってしまいました。私は Pro アンプが好きなんですよ…2 つの 6L6 を搭載し、出力 30W のこのアンプがね。ただただ素晴らしいアンプです。人々がモノラルの Twilighter を必要とす

るのは、このアンプが Pro の特徴を有していて、ソフトに弾いてもラウドに弾いてもサウンドが良く、またペダルとも相性が良く持ち運びも容易であるからです。実に大きくリッチなサウンドを持っています。ブラックフェイスの Pro Reverb と同時に比べてみましたが、Twilighter は約 22W であるにも関わらず、より大きくリッチで、よりフェンダーらしいサウンドを響かせたのです。Pro Reverb と同じものを持ちながらも、それを凌駕していました。Pro よりもフラツツさが少なくなっていますね。まさに現在の私たちのためのアンプです。」

Vintage Amp Restoration のグレッグ・ホプキンス氏は 30 年に渡りヴィンテージの修理、また新しいアンプのデザインを手掛けてきた。マグナトーンのキャビネットの開発にも大いに活躍してきた。我々は輝かしいデザインとトーンをもつマグナトーンアンプのデザインや設計についてグレッグ氏に尋ねた。

TQR 記者:グレッグさん、あなたがマグナトーンアンプのサウンドに及ぼした影響についてお聞かせください。

グレッグ・ホプキンス氏:

「私たちは今までと違った設計方法、またある種今まで行われてきた方法を試しました。典型的なヴィンテージのアメリカンアンプはフィンガージョイントのパイン材を使って作られていましたが、プリティッシュアンプは合板のバーチ材を使用する傾向があります。したがって私たちはフィンガージョイントのパイン材を使うことにし、それを小さめのサイズのアンプで試しました。できる限り小さく作るとは必ずしも良いアイデアというわけではなく、何故なら大きめに作ることで大きなアンプのようなサウンドを響かせることができるからです。」

TQR 記者:上手い方法を見つけるのには多少時間が掛かったでしょうね。

グレッグ・ホプキンス氏:

「そうですね。テッド氏は自身が求めるアンプのあるべき姿に対するアイデアを持っており、私をアンプのデザインの初期段階に関わらせてくれました。私は彼に大まかな寸法でキャビネットを作ることを頼まれましたが、シャーシが取るであろう姿を私たちは知る必要があると彼に伝えました。彼はこれを了承し、3D のプロトタイプができる素晴らしいエンジニアを関与させることができたので、私たちはトランスやスピーカーの最適な位置を知ることができ、それがとても役に立ちました。手探りでの作業では無かったですね。」

TQR 記者:そうして最初のキャビネットが完成したのですね？

グレッグ・ホプキンス氏:

「そうです。最初のプロトタイプです。プロトタイプはたくさん作りましたよ。」

TQR 記者:それらはどのくらい現在の結果に繋がったのでしょうか？

グレッグ・ホプキンス氏:

「とても効果的でした。見栄え良くサウンドも素晴らしいものになりました。私はいつもテッドに多くの選択肢を用意しないよう助言しています。そうしてしまうと個々のアンプがカスタムオーダーになってしまい、製作環境に適さないものになってしまいますからね。」

TQR 記者:あなたがアンプのデザインにおいて素晴らしい役割を果たしたことに同感です。本当に別格の出来ですね。

グレッグ・ホプキンス氏:

「高価なアンプですが、求めてくれるマーケットは存在します。アメリカ製の製品として作り、そして競合相手が国外生産をしている場合は、真に特別で独特な何かを用意しなければなりません。マグナトーンの Master Collection のキャビネットは作るのにはとても苦労しました。フロントに巻き付けたグリルは上手く作るのにとっても難航しましたが、そのおかげでアンプの外観は最高にクールなものに仕上がったと思います。これはマグナトーンが今まで行ってきたことからの脱却であり、アンプの構造に多くの向上点をもたらしました。私たちはアンプを覆う生地を作る工場に出向き、数多くのサンプルを作ってもらいましたよ。サンプルが作られる度にテッドと私で会議室に籠りましたね。」

TQR 記者:真のカスタムメイドアンプですね。

グレッグ・ホプキンス氏:

「その通りです。しかもまだ成長中です。ただの既製品にとどまらない多くの機能がこれらのアンプには搭載されており、かつてのマグナトーンもとても良いものですが、新しいモダンなマグナトーンは現在のプレイヤーにとって遥かに使いやすいものになっていると思いますよ。」

Review

45 Watts of Brilliant Tone, Power & A Unique Signature Sound

Super Fifty-Nine MK II



MK IIはマグナトーンの最新版フラッグシップ機であり、4つのブリッジ可能なインプット、2ボリューム、そしてブライツチャンネルとノーマルチャンネルを搭載している。マスターボリュームと4バンドのプリティシユーンスタックにより、どの音量でも70年代のマーシャルクラッチサウンドを作り出し、さらに真空管によるバッファード・エフェクトループ、マグナトーン独自のバリスタ・ピッチシフティング・ヴィブラートがこのアンプを包括的にユニークなものにしている。出力は45Wで、プッシュプル式のクラスA/B仕様だ。

パワー管にはEL34を2本使用し、また他にも12AX7を4本、12DW7を1本使用している。NORMALチャンネルとBRIGHTチャンネルではそれぞれハイセンシティビティー/ローセンシティビティーの選択が可能だ。またスイッチによりピッチシフティング・ヴィブラートとトレモロの切り替えもできる。

MK IとMK IIの相違点については、MK IIはダイオードによる整流を用いたソリッドステート回路、より深みのあるシングルステージのヴィブラートを持ち、4つのブリッジ可能なインプット、2ボリューム仕様等が挙げられる。インプットのブリッジにより両方のチャンネルのブレンドが可能で、独特なサウンドが作り出せる。

MK IIはパフォーマンスにも適したアンプで、かなりパワーもあることからバンド内での存在感も抜群だ。ディープでリッチ、そしてパワフルな響きを持ち、さらに他のマグナトーンアンプと同様に、ブライツなトレブルトーンは豊満で鮮明であり、決して薄くなくシャープにならない。クリーントーンも程良い具合で、クリーンコードやソロには十分すぎるほどであり、またギター本体のボリュームコントロールひとつで厚みのあるオーバードライブトーンへ変貌させることもできる。

ここでのレビューで取り上げる他のアンプと同じように、ピッチシフティング・ヴィブラートはもちろん話題性抜群ではあるが、他にもマグナトーンの持つ優れたリバーブやトレモロの存在を一気に霞めてしまうわけではないのでご安心いただきたい。



良いギターを使用すればMK IIはそのギターの限界をさらに広げ、あらゆるトーンや質感を与えてくれる。そのギター独自の個性を前面に出しながらも、繊細にMK II独自の持ち味も加えてミックスしてくれるのだ。サスティーンのあるディストーションは演奏の喜びを感じさせ、クリーントーンはピュアで汚れない。Warehouse Speakers社製のスピーカーもこのアンプとの相性は抜群だ。優れた処理能力とビッグ・ボイスコイルにより、MK IIを優雅に導き、大音量のクリーンもオーバードライブトーンも巧みに響かせてくれる。あなたはきっとこのスピーカーを気に入ることだろう。もちろんアンプも同様だ。

Review

Lush & Rich—One of the New 'Must Have' Amps

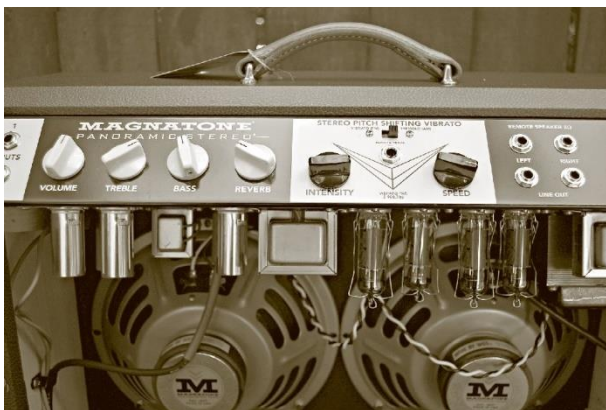
Panoramic Stereo



Panoramic Stereo はとても特徴的で優れたトーンデザインを持ち、レコーディングにもライブパフォーマンスにもふさわしいアンプだ。10インチのスピーカーが2発搭載され、4つのEL84をプッシュ/プル(12W + 12W)で使用している。バリスタによるピッチシフティング・ヴィブラート(スイッチでトレモロに切り替え可能)、優れたリバーブも搭載され、本物のクラシックボイスを持った最高に使いやすいアンプとなっている。また何よりも、複雑で効果が疑わしいようなコントロールに煩わされる心配がない。PanoramicのコントロールはVolume、Bass、Treble、Reverb、そしてピッチシフティング・ヴィブラート用のIntensityとSpeedが用意されているのみだ。ピッチシフティング・ヴィブラートはショーでは注目的になり、またリバーブも同様に素晴らしい。これらのエフェクトと共に真のヴィンテージボイス

が奏でられることは想像に難くない。ピッチシフティング・ヴィブラートはトレモロと比べると瑞々しくリキッド感あるエフェクトになっており、他には存在しない深みのある揺れは病みつきになること間違いなしだ。

とても鮮やかであり、リッチかつ明瞭な本機は、クリアなクリーントーンを持ちながらも、ボリュームを上げていけば徐々に肉厚なオーバードライブトーンへと変化していく。ボリュームが上がってもミッドやベースは失われず、リッチで堂々としたトーンを作り出してくれる。どんなにコントロールをいじろうとも、その忠実かつ強い存在感は変わらない。



マグナトーンアンプにおいて我々が何よりも感服するのは、クリーンセッティングとボリュームを上げた際両方のその秀逸さだ。ギター本体のボリュームひとつでクリーントーンと美しくも豪快なオーバードライブトーンの間を自由に行き来できる。Panoramic Stereoのその忠実さには驚くばかりで、これは決して見過ごすことのできないものだ。12W + 12W といっても十分な音量を持っており、かなりの存在感を発揮する。ボリュームを上げた際にもトレブルをカットする必要がないようにあらかじめ調整されている。トレブルトーン

はとてもスムーズで音楽的に仕上げられており、とげとげしさがなく耳障りにはならない。ヴィンテージトーンを出したいときには美しく広がりのあるヴィブラートが深みを付け加えてくれる。トレモロも同様に素晴らしく、豊かでリッチなリバーブもある。真のヴィンテージトーンを求めるプレイヤーたちを喜ばせること必至のアンプである。

Review

15 Watts of the Best Signature Tones Money Can Buy

Varsity Reverb



「一晩中弾けるアンプ」。最初に我々が Varsity Reverb の音を聞いたときの感想だ。

Varsity Reverb は 15W のプッシュ/プル・アンプで、パワー管に 1 ペアの EL84 を使用している。また 12AX7 を 2 本、12DW7 を 1 本、整流管には GZ34 を使用する。コントロール類は Volume、Treble、Bass、Reverb、そしてフィードバックの ON/OFF スイッチだ。ラインアウトやリモートスピーカー用のジャックも用意されている。フィードバックの ON/OFF スイッチは優れた機能で、ON にするととてもクリアでバランスのとれたトーンになり、OFF にするとゲイン、ミッドレンジが増加する。必要に応じた使い分けが可能だ。

Varsity Reverb は 15W だが、むしろ 20W のサウンドに近い感覚さえ覚える。非常に優れたブライトなトーンを持ち、活発で倍音もたっぷりと含んでいる。新しいサウンドを発見したくなる欲に駆られることは間違いない。重さや遅さなど感じさせず、エネルギーに満ち溢れ、カラフルで高揚感あるフィールを持っている。この明快で限られた数のコントロールには好感が持てる。簡単に自分の必要とする音に辿り着けるからだ。クリーントーンは美しくきめ細かく、またフィードバック OFF ポジションではオーバードライブ・サステーションが得られ、これにはビリー・ギボンス氏も喜ぶことだろう。余談だが、ビリー・ギボンス氏はツアーではマグナトーンアンプのみを使用している。



本当に見逃してはならない素晴らしいアンプだ。このような卓越した 15W のアンプは他に存在せず、どんなギターとピックアップのコンビネーションでもそれを補完してくれる。製作のクオリティには非の打ちどころがなく、かつてのマグナトーン社による製品をも遥かに凌駕している。純粹に現在最高峰のアンプの一つだ。低出力のアンプが必要で、美しいトーンに溢れ、クリーンで弾いてもダーティに弾いても素晴らしいものを欲しているならば、Varsity Reverb はあなたにぴったりのアンプだろう。

Review

A Professional Rig For Tonefreaks

Twilighter Stereo



Twilighter Stereo は、マグナトーンのラインナップにおいてスターの座に輝いているアンプの1つだ。新しいアンプの購入を考えているのであれば、決して見逃してはいけないアンプだろう。

4本の6V6パワー管を使用し、他にも12AX7を5本、12AU7を2本、GZ34整流管を使用している。またEminence社製の12インチスピーカー2発から22W+22WのクラスABステレオサウンドを響かせる。

Twilighter Stereoはバリスタによるピッチシフティング・ヴィブラートを搭載しており、スイッチで伝統的なトレモロとピッチシフティング・ヴィブラートの切り替えができ、Mono/Stereo/Wet/Dryの切り替えができるセレクタースイッチも備えている。

コントロール類はVolume、Treble、Mid、Bass、

Reverb、そしてエフェクトに対しMono、Stereo、Wet/Dry、Dry/Wetの切り替えができるセレクタースイッチ、Intensity、Speedが用意されている。さらにインプットを2つ備え、8Ωのリモートスピーカー用ジャック、ラインアウト用のジャックも用意されている。本物のヴィンテージトーンが染み込んだ、感動的なほどのヴィンテージアンプである。

Twilighterは真のプロフェッショナル用の機材であり、十分以上のパワー、空間を震わせる2つの卓越したスピーカーが内蔵されている。そしてクリアかつリッチな低音域から、明快なプレゼンスを持つ中音域、ブライトかつシャープな高音域まで幅広いレンジを持ったヴィンテージトーンを奏でてくれる。

マグナトーンアンプは様々なトーンセッティングを可能にしてくれる卓越した素晴らしいトーンスタックを備えている。このアンプはクリーン、オーバードライブともに優れており、リバースも同様に素晴らしい。セレクタースイッチによる各セッティングも魅力であり、トーンの可能性を広げ、しかも全て使いやすい。煌めくようなクリーントーンでも倍音が豊富な歪みでもTwilighterならやっつきのける。またかなりのパワーが備えられており、我々は22W+22Wのアンプがボリュームレベルを少し抑えなければならぬほどに十分なパワーがあるとは予想だにできなかった。もしそういったパワーやボリュームが必要なのであれば、このアンプは難なく応じてくれることだろう。



Twilighterは我々が「ヴィンテージ」と呼ぶような、美しく、緻密で複雑なレンジを持ったトーンを届けてくれる。使いやすく、創作意欲を刺激してくれるEQや役立つ機能も満載だ。Twilighterは確実に現代最高峰のトーンを持った刺激的なアンプであることは間違いない。あなたとギターとの関係を即座に深く、強くしてくれる。非常に高い自信を持ってお勧めできるアンプだ。